

巻 頭 言

徒然なるままに自分の苦手な「書く」ということについて、述べてみたい。研究論文であれ、エッセイであれ、ビジネス文書であれ、「書く」ということはどういうことなのか、毎日のように突きつけられている課題である。メール一つとっても、過不足のない事務的なメールから、冗漫なメールと様々である。

文体には好みもあるので、どういう文が上手な文でまた悪文であるとは簡単には述べることは困難ではあるが、誰が読んでも、筆者の言わんとすることが自然に伝わってくる文というものはある。文体の存在を感じさせないのが名文なのかもしれない。

若い人にはもう馴染みがなく遠い存在かもしれないが、「文の達人」と言えば、福原麟太郎氏を抜きに語ることはできないであろう。存在が大きすぎて、出身大学の先輩と呼ぶことが憚られるほどだが、代々、同窓の諸先輩方から脈々と言い伝えられている氏の言葉は、誰にでもわかる「平明な文を書け」ということである。「内容が本当に理解できていれば、どのような難解な内容も、誰にでもわかるように平明に書けるはずで、平明に書けないのは、果たして、理解できて書いているのであろうか」という大きな問いを残されている。研究論文は客観的かつ論理的な、冷静な文体で執筆し、エッセイは筆者の性格が出る味わいのある文と、内容によって文体を使い分けられたらさぞかし痛快であろうと思うが、この域には達することは至難の技であろう。

同時通訳の草分けの一人で後に参議院議員になった國弘正雄氏から、自分の日本語に漢語が多いこと、英語も難解なことばが多いことにコンプレックスを持っていると学生時代に直接聞いたことがある。「どうして自分は Iris Murdoch のように易しい言葉で人間の心の機微を表すような表現ができないのであろうか」と何度も語っていた。

日本語でも英語でも、平明でかつ格調高い文を書くのは、果たして、可能なのであろうか。答えはなかなか出そうにはない。

この紀要に投稿された論文は英語コミュニケーション学科の教員の常日頃の研究の成果である。一本の論文に一つの発想ということが挑まれる厳しい研究生活の中、本学科教員は学生の教育指導ならびに研究に真摯に取り組んでいる。そのたゆまぬ努力に敬意を表するとともに、本学科の教育研究活動がこの紀要を一拠点として、更に活発になることを祈念したい。

最後に、この紀要の出版に際して、編集室の方々のご尽力に心から感謝の意を表したい。

(英語コミュニケーション学科 ふみ)